

公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団

2017年度（前期）指定公募
「看取りの経験を語る会への助成」
完了報告書

<テーマ>

「看取りとは？～さまざまな立場の経験から～」

平成29年11月11日（土） 第1回
テーマ：介護に関わる立場から

平成29年12月16日（土） 第2回
テーマ：医療に関わる立場から

平成30年1月13日（土） 第3回
テーマ：様々な看取りの経験から～これからの看取りと家族～

申請者：赤川 直美

所属機関：特定非営利活動法人エンディングノート普及協会 理事長

提出年月日：2018年2月21日

「看取り」での経験を語る会 開催概要

開催時期：平成29年11月～平成30年1月

開催場所：第1回 エムシー福山 大会議室
第2回 ものづくり交流館セミナールーム B

目的：様々な立場の方の「看取り」の経験を伝えることで、一般市民の方への在宅医療への理解、その啓蒙、普及に貢献する

形式：全3回、各2部構成

- ・第1部：専門家による講演
- ・第2部：専門家を交えたパネルディスカッション

開催内容：第1回 介護に関わる立場から

- ・第1部 講演
講師：森田 裕治氏
社会医療法人 社団 沼南会
管理栄養部 リハビリテーション部 副部長、理学療法士
- ・第2部 パネルディスカッション
パネラー：森田 裕治氏
井上 昌江氏（介護福祉士）
檀浦 鈴香氏（介護福祉士）

第2回 医療に関わる立場から

- ・第1部 講演
講師：丸山 典良
在宅医療専門 まるやまホームクリニック院長
- ・第2部 パネルディスカッション
パネラー：金山 栄美氏（在宅医療専門クリニック看護師）
布施川 雅子氏（訪問看護認定看護師）
山根 暁子氏（在宅薬剤師）

第3回 様々な立場の経験から～これからの看取りと家族～

- ・第1部 講演
講師：奥野 修司氏
ノンフィクション作家
- ・第2部 パネルディスカッション
パネラー：赤川 直美（協会理事長）
江星 優哉（協会終活サポート事業部長）
鳥居 志穂（協会監事）

参加者：延べ126名（第1回～第3回）

広報手段：チラシ配布 2,000枚
コミュニティラジオ出演 1回
経済リポート、山陽新聞（備後版）掲載
Facebook、協会公式ブログ、Twitter

各回定員 50名

入場無料

平成13年学校法人九曜学園川崎ハビリーテーション学院卒業後、現在の沼南会へ就職。近年は同法人内の通所介護施設、高齢者複合施設等の立ち上げに関わる。現在は、同法人内で経営・キャリア支援・地域への講座企画・開催など幅広く活動している。



森田裕治氏

(社会医療法人社団 沼南会・理学療法士)

パネリスト

井上昌江 (介護福祉士)、檀浦鈴香 (介護福祉士)

～介護に関わる立場から～

第1回

11月11日(土)

13:30～15:40

エムシー福山 大会議室
福山市東桜町1-41(ハローワークと同じ建物)



奥野修司氏

(フリー・ジャーナリスト)

パネリスト

NPO 法人エンディングノート普及協会

赤川直美 (理事長)、江星優哉 (終活サポート事業部長)

鳥居志穂 (監事)

～これからの看取りと家族～

第3回

平成30年 1月13日(土)

13:30～15:40

福山市ものづくり交流館
セミナールーム B

看取りとは？

「看取り」での経験を語る会

さまざまな立場の経験から



丸山典良氏

(まるやまホームクリニック・院長)

パネリスト

金山栄美 (看護師)、布施川雅子 (訪問看護認定看護師)

山根暁子 (在宅薬剤師)

～医療に関わる立場から～

第2回

12月16日(土)

13:30～15:40

福山市ものづくり交流館
セミナールーム B

あなたは一人じゃない
最後まであなたらしく
いつもそばにいるよ

主催：特定非営利活動法人エンディングノート普及協会

お問合せ・お申込み 080-4265-4279 (赤川)

後援：中国新聞備後本社・福山市・中国放送・テレビ新広島・広島ホームテレビ

広島テレビ・広島エフエム放送・エフエムふくやま・Nursing rose

※公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団の助成を受けています。

第1回 介護に関わる立場から

- ・ 第1部 講演 講師：森田 裕治氏
(社会医療法人社団沼南会管理栄養部 リハビリテーション部 副部長、理学療法士)
- ・ 第2部 パネルディスカッション
パネラー：森田 裕治氏、井上 昌江氏 (介護福祉士)、檀浦 鈴香氏 (介護福祉士)



第一部の講演では、実際に介護施設内での看取りに取り組んでおられる、社会医療法人社団沼南会の森田裕治氏に、介護現場における看取りの現場、課題などをお話しいただいた。

介護現場では「看取り介護加算」の実施により、在宅介護・在宅看取りの自宅以外の選択肢として「介護施設」がその役割を果たすようになった。しかしそこには、人手不足や介護職員の死に対する経験不足など、様々な課題も浮き彫りになっている。

その中で、

- 施設や専門職、家族、地域、行政の全てが情報を共有し、連携していく時代に向けてどう取り組むか？

という課題に対して「人生の自己申告」をしておくことなど、これからの課題を解決するための現場の取り組みが紹介された。

第二部のパネルディスカッションでは、森田氏に加えて2名の介護福祉士の方にご登壇いただき、進行役は一般の方代表として本協会理事長の赤川が勤めた。

今後の課題として、

- 家族とのコミュニケーション、連携が大切でそのために職員は動いているが、家族との間にすれ違いが生じてしまうのはなぜだろうか
- 情報共有をして欲しいと望む介護関係者と、まだ大丈夫と先送りして手遅れになってしまう家族の間には、どんな考え方の違いがあるのだろうか

など、現場専門家の立場と家族側のそれぞれの立場から意見を出し合い、お互いを理解する良い時間となった。

第2回 医療に関わる立場から

- ・ 第1部 講演 講師：丸山 典良氏（在宅医療専門 まるやまホームクリニック院長）
- ・ 第2部 パネルディスカッション
パネラー：金山 栄美氏（在宅医療専門クリニック看護師）、
布施川 雅子氏（訪問看護認定看護師）、山根 暁子氏（在宅薬剤師）



第一部の講演では、医師として長年の在宅医療や在宅看取りに関わる立場から、在宅看取りについて、在宅医療専門のまるやまホームクリニック院長 丸山典良氏にご登壇いただいた。

病院死と在宅死の違い、在宅看取りに向く場合、向かない場合、独居やお一人様の在宅看取りなど、実際のケースが紹介され、在宅看取りの場合は「悲しみの後にいつも笑顔がある」と、家族が介護したことによる充実感を感じていることが報告された。

また、これから増える独居高齢者の在宅死に対しては「家族がいないからこそ自分で決めて過ごすことができるが、そのためにはガイド（専門家で構成されたチームなど）が重要である」という提言があった。

第二部のパネルディスカッションでは、まだまだ一般の方には馴染みのない訪問看護や在宅薬剤師の役割などが紹介された。

会場内の一般参加者からは「まずはどこに相談したら良いのか」「どこまで相談できるのか」などの質問とともに「自宅に医師や看護師などが来てくれるのは良いが、家族は気を使って疲れるのではないか」などの声もあがった。

参加した専門家からは「まだまだ馴染みがないことがわかった」「家族の方の本音を聞く良い機会になった」など、ディスカッションを通してお互いの理解を深めることができた。



会場内ではまるやまホームクリニックで導入しているメディカルアロマの紹介としてNursing roseメンバーによるメディカルアロマ体験も実施された。

第3回 様々な立場の経験から～これからの看取りと家族～

- ・ 第1部 講演 講師：奥野 修司氏
(ノンフィクション作家、「看取り先生の遺言」他 執筆多数)
- ・ 第2部 パネルディスカッション
パネラー：赤川 直美(協会理事長)、江星 優哉(協会終活サポート事業部長)、
鳥居 志穂(協会監事)



第一部の講演では、東京都町田市在住のフリージャーナリストで、ご自身もお父様、お兄様の看取りを経験されている奥野修司氏にご登壇いただいた。奥野氏は、ご自身の執筆された「看取り先生の遺言 2,000人以上を看取った、がん専門医の「往生伝」」(文藝春秋出版)において、医師でありかつがん患者として闘病を経験し「看取る側から看取られる側」となった人物の亡くなる日までの様子・遺言を書き記している。

講演の中では、これまでのご経験や取材で出会われた方のお話はもとより「なぜいい看取りが必要なのか」「希望死、満足死、納得死」「お迎え体験」「家族にとってのいい看取り」など、様々な立場の経験からというテーマに相応しい講演内容であった。

講演のキーワードは家族側の「覚悟」と「達成感」。この部分については、第2回の丸山院長の内容と共通することも多く、これからの看取りと家族の課題が明確になった。

第二部のパネルディスカッションでは、今回の講演会を主催した特定非営利活動法人エンディングノート普及協会の会員が、それぞれ家族の看取りを経験している3人がパネラーとして登壇した。経験から思うこと、経験から考える在宅看取りの課題、専門家との橋渡しとしての協会の役割など、会場からの質問に答えながら3回の講演会の総括を行った。

今回の三回連続講演会を開催することによって、様々な気づきがあった。

まず、家族や身内など専門職以外の人たちの「在宅看取りへの理解の低さ」について。

介護、看護の在宅への移行は厚生労働省を中心に進められているが、2000年に介護保険制度がスタートし、在宅介護から施設介護に移行して20年が経過した現在、再度、在宅介護に戻ることは困難を極めているように感じられる。

現在は、かつて病院死90%以上であった状況と比べて病院死は多少の減少傾向にあるものの、自宅死の割合は平均して12.7%（厚生労働省「平成29年我が国の人口動態」より）に留まっている。実際に「戻りたくても戻る家がない」「介護をしてくれる人がいない」など、現実的な問題もあるが、病院死に慣れてしまった家族たちは、自宅で終末期を過ごすことについて不安を抱えており、次々と変わる制度についていけず、在宅で受けることのできるサービスについて理解していないことなども明らかとなった。

また、介護や看護、医療従事者を含めた専門職と家族や身内などサービスを受ける側の話し合いの中で、家族側からは専門用語が多くてわからない、説明する速度が早くて理解できないという声がある一方で、専門職側からは時間不足、人手不足の中で多くの説明を短時間で行わなくてはならない現状や、現場では当然のこととして行っている医療行為や介護サービスが家族にとっては理解できないことなど、専門職の現状と家族の理解にかなりのギャップがあることも、3回のパネルディスカッションの中で明らかとなった。

次に、専門職の「看取りへの関心の高さ」について。

今回の講演会は、これまで終末期や看取りを病院に任せてきた一般市民の方に、様々な立場の方の「看取り」の経験を伝えることで、在宅医療への理解を促すことを目的としていた。しかしながら、今回の講演会に参加した人の半数以上が介護や看護、医療従事者など専門職であり、とりわけ介護に関わる専門職の参加が多かった。これは、介護施設が自宅に代わる在宅介護、在宅看取りの場としての役割を求められていること、そしてその役割に対応するための職員教育や利用者、家族と関係について不安を抱えている専門職が多いことによるものと思われた。

介護施設に勤める若い職員の多くは、人の終末期を一緒に過ごしたことがない人、実際の看取りを経験したことがない人が多く、専門職であっても施設で看取ることに関して教育を行う必要がある。さらに、介護専門職以外でも、看護や医療従事者の多くの方が国の制度の変更や多死社会への対応を通じて、これまで行ってきた専門分野だけでなく他の分野との連携を求められることも多く、そのため、今回の講座への専門職の関心が高かったのではないかと思われた。

今回の講演会を通して、これまで特定非営利活動法人エンディングノート普及協会が果たしてきた「不安を抱える家族と専門家を繋ぐ」という役割の重要性を再認識するとともに、今後も継続的に勉強会等の交流の場を作っていく必要性を感じた。